独創的研究の方法論

市川亀久弥

私は広い意味で、理工学関係者の一人であるが、その私がお前の専門は何か、という質問を受けたとき、ほとんどの場合に当惑しつづけてきたようである。理由というのは、一言で、多くの方々を納得させるような返答が出来なかったからである。従って、ある場合には世間ばなれのした哲学に属するものとみられたり、また他の場合には、心理学、あるいは論理学などの分野に属しているともみられてきたのである。否、そういった誤解の出現は、いまだ有難い方であって、あいつはどうも、このごろ頭がおかしいのではないか、〈誇大盲想〉のけがあるのではないか、などという影の声を耳にしたことも屢々であった。ふり返ってみると、過ぐる四半世紀の間、私の学問的情熱をおしみなく吸い続けてきた〈私の研究〉は、つい数年前くらいまでの世間では、なじみも少なく、かつ、実社会における切実な必要性も、いまだ起っていなかったかのようである。

題して〈独創的研究の方法論〉あるいは〈創造工学〉といったテーマが、私の選んだ専門であり、まだ、私が何程かの寄与をなし得ていると信ずる、新しい学問の分野なのである。古来、独創とか創造とかいわれるものは、常人の立入ることのない天才業とみられてきた。こういった観点に立つと、独創とか創造とかいったものは、数少ない特殊な人間の、特殊な精神活動によるものとなって、私ども常人がこの神秘なメラニズムを明らかにする、などということは、許し難いことであるか、でなければ、始めから不可能な仕事に取り組んでいる、身のほど知らずの大馬鹿者であるとみなされてきた訳でもある。

しかし、学問技術の世界における進歩というものは、常識の思わくやしきたりなどに関係なく、天才的創造者の思考のプロセスや、創造的な研究の方法などに関する多くの解明に成功を収めるにいたった訳である。凡ての〈ナゾ〉が解け尽したという訳ではないが、発明・発見・創作などにまつわる思考の法則性ないし研究の仕方に関する法則性は、次第に明らかとなってきた次第である。こういう学問上の新知識によって、従来頭が良いといわれてきたことなどについてみても、これを思考力抜群型と記憶力抜群型とに区別して考えなければならないこと。また、これらに関して、学業試験成績と創造的能力とが、これまでの常識に反して全く相関をもたないことなどが明らかとなった。米国などでは、こういうデータの出現によって、いまや創造的才能の開発と発見に大わらわとなっているのである。わが国でも昨今にいたって、心ある識者の方々の注目を得るにいたったことは、私ども創造理論にたずさわれている者の望外の喜びである。

（理工学研究所教授）